



夢を信じる力の大切さを伝えたい! ～出前授業～



(左から)古坂大魔王さん、柴田清志大淀小学校校長、橋ゆりかさん(MC)と子どもたち

12月19日、大淀小学校で「夢を信じる力」の大切さを伝える「avex class」が開催され、お笑い芸人で音楽プロデューサーの古坂大魔王さんが登壇しました。子どもの頃テレビに映る人気芸人を見て「芸人になって人気者になりたい」と夢を持った古坂さん。「夢を持てば頑張れるし勝っても負けても楽しい。でも、夢を持ってないダメなわけではない、夢は気付いたら持っているもの」と自分の経験を踏まえて6年生の子どもたちに話しました。「将来の夢は?」という質問に対し、「ハリウッドスター」「漫画家」など次々と答える子どもたちにアドバイスやエールを送った古坂さん。子どもたちの笑顔と元気あふれる楽しい授業となりました。

中学生親善ソフトボール大会優勝報告

12月6日、大阪市青少年指導員連絡協議会主催の「第46回大阪市中学生親善ソフトボール大会」に北区代表として出場した大淀中学校のチームが北区役所を訪問し、北区長に優勝を報告しました。

西区代表チームとの決勝戦では、女子ピッチャーが先発・完投し12対9のスコアで見事優勝したことを報告。北区長は、「今回の優勝が皆さん一人一人の夢や将来につながると思う。子どもたちの夢づくりをこれからも応援したい」と語り、大会に関わった青少年指導員の方々へも感謝を伝えました。



「こども110番」運動をご存知ですか



子どもたちが安心して暮らせる環境を確保するため、「こども110番」運動を推進しています。区内の街頭犯罪発生件数は減少傾向にあるものの、「特殊詐欺」や「子どもへの声掛け事案」は増加傾向にあり「子どもを見守る目」がこれまで以上に必要となっています。「子どもを見守る目」を強化することで、子どもたちだけでなく高齢者や女性を狙った犯罪防止、障がいのある方が困っている場面等での支援にもつながると期待しています。

問 地域課 ☎06-6313-9549 ☎06-6362-3823

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

私たちのSDGs④

地球規模の環境問題や社会課題の解決も、まずは一人ひとりの小さな実践の積み重ねから。毎月、区内の様々な活動をお伝えします。

WAKKA (ワッカ)

食材の量り売りを通して ごみを減らし会話を増やしたい

パッケージされた商品を次々と買い物かごに入れ、セルフレジで精算。誰とも話さないまま、家にトレイやラップのごみがたまる。量り売り食材店「WAKKA」(中津3)店長のジャズーリ陽子さん「そんなスタイルから、ちょっと視点を変えてもらう場になれば」と話します。

夫とモロッコ料理店を営むジャズーリさんがWAKKAを始めたのは2022年8月。子どもたちの将来を考えてのことでした。温暖化による洪水や山火事の多発、農業や漁業に現れる異変。「このままの消費生活を次の世代が続けられるわけがない。自分の手の届くところから変えていきたいと思ったのです」

店には豆类やパスタ、大豆ミート、スパイスなど約40種類のオーガニック食材の瓶が並び、夫が現地で買い付けたモロッコ雑貨が彩りを添えます。希少なアルガンオイルもおすすめの一つ。客は瓶などの容器を持参し、スタッフと相談しながら欲しい物を必要な量だけ購入します。ごみを減らすと同時にフードロスを減らし、会話が生まれます。

開店からもうすぐ1年半。「量り売りって浸透しにくい」と感じる日々です。買い物は1か所で済まないし、食材を入れた瓶を置く場所も必要。「ライフスタイルを変えなきゃいけないから、時間がかかるんですね」

2か月に1回、大学時代の恩師を招いて人権講座を開いています。「私たちは、気付かないうちに自分の権利を明け渡してしまっている」とジャズーリさん。



食材の瓶を並べる机や棚にも廃材を利用した

健康に生きる権利、子どもたちが地球の資源を享受する権利…。それは、店名の由来でもある「輪っか」のように、量り売りの取組につながっています。

ホームページ▶



WAKKA 中津3-17-5
UPCYCLE中津荘102

店長の
ジャズーリ陽子さん



ちょっと元気になったり クスリと笑える存在に



(左から)豊田麻衣子さん、オサムさん

大阪天満宮の表参道を歩くと、「薬食さふらん堂」(天神橋1)の白いのれんが目を引きまします。地元の人はもちろん、合格祈願の参拝者や観光客、外国人が店ののぞき、豊田オサムさん、麻衣子さん親子の笑顔に迎えられます。

店内には、古いものでは飛鳥時代から続く日本各地の伝統薬が約35種類並びます。身近な薬草などを調査して作られ、継承されてきた薬は、長い間使われ続けてきた安心感があります。薬だけでなく体にいいものを、と国産の香辛料やハーブ、野菜など約80種の食品も置かれています。

薬剤師のオサムさんが営む町の薬局で育った麻衣子さん。「昭和の頃はお客さんがよく、丸椅子に座って父と話し込んでいました。その後、父は調剤薬局に勤め、娘はデザイナーに。2人を再び近付けたのは、80歳を前にした父の「これからは楽しく生きたいな」という言葉でした。

自然の生薬を使ったレトロなパッケージの「昔からある薬」が気になっていた麻衣子さんは、「他にないコンセプトの店を一緒にやってみよう」と提案。自身も薬を販売する資格を取り、2人で日本の伝統薬を勉強。図書館で文献を調べ、製造元に足を運びました。そして令和の初め、「薬食さふらん堂」を開店。サフランは古くから生薬として使われ、スパイスにも染料にもなります。「サフランのように、いろんな方法で役に立つ店でありたい」との思いを込めました。

後醍醐天皇が名付けた「三光丸」、熱いうどんを食べた後に飲むと一晩で風邪が治るとうたう「うどんや風一夜薬」…。日本の伝統薬には物語とユーモアが詰まっています。

店先の看板や店内に、「干し芋ほしいもん!」といったオサムさん得意のダジャレが貼られ、「クスリと笑って、ちょっと元気になってもらえれば」と麻衣子さん。そんな会話が楽しくて、長居する客が少なくないそうです。かつての町の薬局のように。



日本の伝統薬はパッケージも楽しい

北区の
魅力は?

新旧も老若も溶け合っている



Instagram▶

夢・キタ・ひと

22

薬食さふらん堂

豊田オサムさん
豊田麻衣子さん